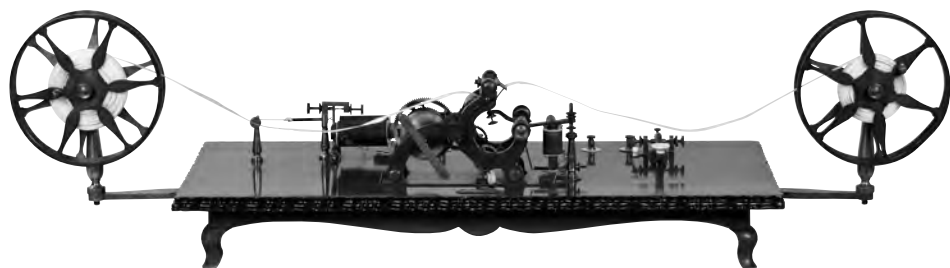


エンボッシング・モールス電信機



エンボッシング・モールス電信機は、嘉永7(1854)年に日米和親条約を結ぶために来日したペリーが、アメリカから江戸幕府に贈呈するために持参した品々の中の1つです。

アメリカのモールスが、電気の断続によって文字の代わりをするモールス符号を送受する電信機を発明し、1844年にワシントン〜ボルティモア間で電信線を開通させました。日本にもたらされたのはその10年後です。

エンボッシング・モールス電信機は、平成9(1997)年6月に重要文化財に指定されました。



サミュエル・F・B・モールス
(1791～1872)

短点と長点の組み合わせによって文字と数字を表すモールス符号を生み出したモールスは、電信機を実用化しました。電線に電流を流し、電気と磁気を利用して針を動かして離れた場所にいる相手に信号を送るという着想はモールスが初めてではありません。モールスの功績は文字や数字をモールス符号に変換し、それをテープに記録する印字器を開発、ビジネスとして電信を実用化したことです。

モールス電信機の仕組みは、①送信キーを押して通信を始めると受信機のコイルに電流が流れます。②コイルの中の鉄の棒が磁石になり鉄片を吸い付けます。③キーを離すと電流が切れ、バネの力で鉄片は鉄の棒から離れます。④

③の鉄片の動きが紙テープに記録されます。

エンボッシング・モールス電信機は、針を押し付けて刻印していましたが、その後針の代わりにペンで記録したり、音で受けたりするようになりました。

産業革命以降、欧米各国は世界に市場を拡大しようとアジアへ進出しました。アメリカは日本に注目し、嘉永6(1853)年、東インド艦隊司令官兼遣日特派大使のペリー(1798～1858)が浦賀に来航、開国を迫りました。翌年2月に日米親条約締結のために来航した際、アメリカより江戸幕府に数々の品が贈呈されましたが、その中に電信機2台と附属品がありました。

贈呈に先立ち、江戸幕府の役人の前で横浜駒形の応接所(右・絵図)と同地の名主、中山吉左衛門宅との間で公開実演が行われました。

この電信機の公開実演は、日本からアメリカに答礼品を贈った際に再び行われました。しかし、その後実用されることなく、竹橋にあった幕府の倉庫にしまいこまれたままになりました。



安政2(1855)年、勝海舟らがオランダより献上された電信機を実験する際に、この電信機も動かそうと取り出しましたが、損傷や部品の損失があって動かせませんでした。

エンボッシング・モールス電信機は後に東京帝国大学の所有を経て当館に寄贈されました。